

伊東七十郎のことについてはまだ記したいことがある。伊東七十郎を伊東の家來から受取つたのは、仙臺の足輕頭の青木彌三右衛門といふものであつたが、青木は伊東の家來から渡した七十郎の刀を受取つて一應抜いて見た。するとその刀は寢起刃が合はせてなかつた。人を斬らうとする時には、其前に善く礪いで斬れるやうにすべきである。寢起刃を合はせるとは其事である。然るに七十郎の刀は常の通りであつた。青木は之を見て七十郎に向ひ、七十郎どの御邊は今度一の關に亂れ入りて兵部殿を斬らんと企ありし由、我等も内々承つて、武士の意地は左こそあるべけれども存じた。然るに何をうるたへて刀の寢起刃を合せたまはざりしにや、御邊の武勇は藩中に知らぬ人もなきに、かゝる不用意は何事ぞと少々冷笑つた氣味で問ひ掛けた。七十郎は左様なことは足下などの知らぬことよ、成程一人二人の小人數と立合ふには刀を礪いで、刃を立てる作法もあれど、多勢を相手の斬合には礪いだる刀は役に立たぬものでござる、我等一の關に亂れ入りたらんには刀の限り根限り、腕のつゞく限り屍の山を築かんと思ひたればわざと寢起刃を合はせぬなり、アハ、足下の武邊沙汰が可笑しければ開くまじと思ひし口も開きたりと、勇士の一言に流石の青木も額に汗を出して黙つてしまつたと云ふことである。そこで七十郎牢屋に入れられ大切な罪囚であると云ふので嚴重に取締りをさせた。これは伊東を憐む者があつて牢屋から救出すことがあつては大事であると考へたので用心を厳しくしたのである。七十郎は牢屋の番人に向ひ、各我等の爲めに晝夜を厭はず見廻らるゝこと氣の毒に存ずるなり、我等聖賢の書を見しに、たとへば一の不義を行ふは天下を得るの利ありとも仁者は敢て爲さずとあり、我等牢破りし

て一身を安くせんと思はゞ敢て難きことにはあらねど、所詮天命の遁れぬ所と覺悟したれば、惡びれて生きんとは願はず、されば用心を厳しうせらるゝ迄もなきか、遁れんと思ふ心もなければ牢番も無益なるべしと云つた。斯ふ言切つた後七十郎は牢の中に端坐し斷食して日を送つた。最早此世に望みなければ死なうと決心したのである。

七十郎が竝の男でなかつたことは仙臺の人のうちに色々言傳へがある。中には七十郎は魔法を心得て居て、不思議な行ひが多く、死刑を受けた時も、斬られたと人の目には見せて、實は遠く高野山に逃げたのであるなど、云ふ説を信じて居たものもあつた。畢竟學問が好きで心法の議論などをしたから、俗人の或者からは「キリシタン、バテレン」の類に思はれたので有らう。熊澤蕃山先生も「キリシタン」の類であるなど、云はれたこともある。我輩の考へでは七十郎の風采はとんと昔の子路に似て居る。學問を實際に行つて少しも猶豫しない。聞いた所はすぐ行ふと云ふ如何にも勇氣のある正直一途の學風であつたに違ひない。其に就いて一の談がある。仙臺に内藤閑齋と云ふ儒者があつた。七十郎などは此閑齋先生の門人である。然るに閑齋先生は中々の學匠ではあるが、どうも短氣で怒り易い。全體學者と云ふ者は氣隨者が多い。一藝に長じて居る者は必ず心の中心が一方に偏つて居るもので、名人の氣隨といふのは諺のやうになつて居る。されば閑齋先生の短氣と云ふても別段不思議はない。しかしながら性を矯めるの、情を抑へるの、意を誠にするのと云ふことを教へながら、遽に物に激して血相を變へ、手近に在るものを抛つたり、刀の柄をひねくり廻したりする様では肝腎の學問がたゞ口さき計りになつてしまふ。七十郎は勿論師匠思ひであるから閑齋先生がどんなに癩癩を起しても、それで先生を見捨てる様なことは無い。人には一癖のあるものである、先生の癩癩は善いことではないがつまり心の曇らぬ清々

二 心法 心を修養する方法。
三 子路 孔門十哲の一人。素朴で正義感が強く、政事・武勇に優れた。

しい處から出た過あやまちであつて必ずしも尤よがめるに足りない、しかしそれが爲めに俗人の笑を招くやうでは、先生の爲めにならないから是れはどうかして謹つしむ様にして欲しいと思つて、數々閑齋先生を諫いさめた。閑齋先生も尤もとは聽いて、諫められる時は快く承知するが僻くせといふものは中々ちよつと直るものでないから直すくに例の短氣を出す。或時の如きは此短氣の爲に閑齋先生の身の上かへで關かることが持ちあがらうとしたこともある。七十郎はそれを敷なげはしく思つて、何うか機會があつたら先生に十分言はなくてはならないと思つて居つた。

すると或時伊東采女うぶめの宅で客をした事があつて、閑齋先生もやつて來た。七十郎も同席したが心に思ふ所があつたので、態わざと物云ふ節ふしにも先生に衝つきかゝる様子を見せた。常でさへ怒りやすい先生であるから此體このていを見て、例の疖癩かんしゃくがむら／＼と起つて、刀の柄を握つて立ち上つた。七十郎はわざと、閑齋老怒られたな、はゝ、誠に我を斬らんとならば斬りたまへと身をすり寄せた。閑齋は烈火れつくわの如く怒つて刀を抜かんとした。七十郎はちよと閑齋の腕を抑へて動かさない様にした。大力だいきの七十郎に抑へられて閑齋は身をもかく許ばかりである。時に七十郎は涙をはら／＼と流し、先生心を靜めて聞きたまへ、先生我を殺したまはんとしたりとて、我も亦手を束つかねて先生に殺さるゝもの候きりかへはず、差さちがふるか、相撃あひつちにするか、二つに一つも雙方きうほうの生命いのち全まうたことは候はず、かくては一朝いちようの怒りに身を忘れ、死して國家に益なきものとなり果つるに候はずや、先生の常に我等に教へ給ふ學問は、よもかゝる愚おろかなる事を教へじと存ぞんずるなり、學ぶ處行ふ處なに違ちがひては聖賢の書も取るに足らぬものと思おも悔あなるものもあるべき歟か、學問を尊たくするも卑おんしくするも御おん身の行み一ひとに在あり、篤とくと御思案候へと言切つた。閑齋先生も誠を籠めた七十郎の意中いんちゆうを言下げんかに悟り、それより終おしまひに行を改めたとのことである。七十郎の人品じんびんは此話このことばに善く現はれて居る。

七十郎は獄屋に入れられてから生命はないものと覺悟した。所詮奸賊小人には勝つことが出来ない、此上は唯死を早くするより外はないと決心したのであつた。此決心は矢よりも鋭く石よりも堅い。いくら牢番の者が氣の毒がつて勸めても少しも食物をたべない。昔し伯夷は不義の穀を食はじと思詰めて首陽の山に餓死したと承はる、我今奸黨の爲めに牢獄に恥をさらし、また牢獄の粟を食まば是れ即奸黨の粟を食むものである、よしなき采女の家臣の輩に支へられて一の關城を屠り姦黨の首若干を斬り、御當家御先祖代々の御廟に備へて孤忠を致さざりしこそ死しても目を瞑り難き恨なれども、天なり命なり今將た何をか言ふべきと云つて、決して箸を下さない。此時の牢番頭は萬石衛門と云ふ者であつたが、これは多少志の有つた男で、七十郎の胸中に深く同情を寄せて、何うかして食事させたいと思つたが、しかし斯ういふ人に勸めるには法がある、一番辱めて食事をさせてみようと思つて、一體あなたは何うして食事を召上らないのか不思議である、或は七十郎どのは牢獄に入つて居ることが、如何にも心細くて悲しい餘りに一粒の飯も咽喉を通らないのであるなど、云ふものもあるが、まさかそんな事と思へど、いづれにしても名高き勇士の身として外聞のわるいことであるから、欲しくなくても我慢して少々なりと召上つたのが宜しいと勸めた。さうすると七十郎はにつこり笑つて、其方が我等に食事を勸めてくれる心は能く分つて居る、故に恥辱しめて何か物を食べさせようとの好意は誠に難有い、しかし我等の量見はお前達にはまだ分つて居ないだらう、おれは食つても食はんでも何うせ間もなく死ぬる身ではないか、しかししばらくひもじいのを堪へること位は何んでもない、つまり、心の置きどころ一つだ、おれが殺されるまで食はずに居たからとて、さう見苦しくへろ／＼に弱りもしまいから、安心して居てくれよと云つた。牢番の者も其氣強い言に呆れて、可惜壯士をその儘にして

四 伯夷 中國古代、周初の人。周の武王を諫めて聞き入れられず、弟の叔齊と共に首陽山で餓死する。廉潔な人物の代表とされる。

朽果てさせるのは残念の事であると思つては居たが何うも仕様がなない。

斯様な風にして七十郎は斷食をすること三十日に及んだ。西洋の歴史に因ると、人間の斷食四十日位は續けることが出来るものと見える。しかし是れは宗教家などがする極度の斷食で、四十日以上になつては到底生きて居ることは出来ないに相違ない。七十郎の斷食は人間が生命のある中に斷食することの出来る極度の四分の三までに及んだのである。大抵の人間ならばもう弱り果て、心も魂も消える許りになつて仕舞ふべき筈である。然るに七十郎は一向平氣である。顔色は相變らず光澤がある。眼は相變らず爛いて居た。痘痕滿面の吉田松陰然たる其顔はやはり痘痕滿面であつた。そこで滿右衛門は兼ねて七十郎の學問が出来て、手も善く書くことを知つて居たので、何うかして勇士の事迹を残して置かうと思つて、此時内々何か書いて下さいと頼んだ。

七十郎は微笑みてそれなら書いてやらうと曰て辭世の詞を書いた。其詞の趣旨は、心の本體と云ふものは寂然と動かず、音も香もない、浪も立たぬ水の表の様に靜かなものである、誰も其靜かな心の水を浪たせ、せることは出来ない、我不肖なれども平生學問する所は、此寂然として動かない心を養ふ爲めであれば、今牢獄の憂き身となりても我方寸は平波萬頃のやうである、此上は唯一日も早く死することを願ふばかりなり、志士は殺すことは出来るが辱しめることは出来ない、我今内に自ら省みて疚しき所なし、將た何をか憂へんといふ主意を書經論語などの中から引いて書き並べたのであつた。かういふことを書いてやつたのを以て見ても、七十郎はいかに學問の根柢ある男であつたかと云ふことが分る。

七十郎が京都に往つて蕃山に入門した時にも、其人物を見るべき面白い話がある。七十郎は子供の時分はうつくしい子であつたさうだが、重い瘡瘡にかゝつた爲めに痘面になつたのみなら

五 方寸 胸の中。心。
六 萬頃 地面または水面が廣々としてゐる事。

ず、少年の時から劍術が好きで荒つぽく育つたからして、顔付が一層きつくこはくなつたのである。それ故蕃山先生を尋ねた時も、取次の弟子が何んだか人相の悪い奴が來ましたと云つたものだから、蕃山先生は七十郎が二度も來たのに二度ながら斷つて面會しなかつた。三度目にやう／＼會つて、そして試みに心外物なしといふ題と知行合一といふ題と二つ出して、之について何か答を書いて見なさいと云つた。七十郎は直ぐに筆を取り、初の心外物なしと云ふ題には、「ちぢの花も心の内に咲くものを、知らず外ぞと思ふはかなし」といふ一首を以て其心持を現はし、次の知行合一といふ題には、「寫し繪に吉野の花ははかるとも、行かで匂ひを如何で知るべき」といふ一首を以て答をした。歌の巧拙は免に角、この歌の意味から考へて見れば、學問の素養あることは推して知られる。蕃山先生もこれは面白い男であるといふので弟子にしたさうである。そこで蕃山先生について一層深く學んだのである。七十郎の臨終にはたしかに哲學者の沈着が現れた。

さて七十郎はいよ／＼死罪を言渡されて、誓願寺河原で斬られることになつた。三十四五日の間の絶食であるから憊れがひどくつて免ても仕置場迄歩行ことは出來ないから、竹輿に乗せて釣つて往かうと云ふ役人中の相談であつた。所が七十郎の氣力は愈盛んであつて、中々竹輿などには用ひさうもない。御國の爲めに奸賊を除かんと一途に思ひ詰めた孤忠は人の願る所とならず、却て奸賊の手に落ちて罪なくして死すること命なり天なりと雖も、世々御恩蒙つたる御家の安危を思へば死しても目を瞑り難し、今に見よ、三年を過ぎぬ中、幽霊ともなり、魔界ともなりて御家に仇する奸賊どもをよも安穩には置くまじきぞ、我等の覺悟は此の如し、さればこれしきの斷食に身の弱るほどにもあらず、三十餘日一粒も咽喉に通さず、不義の粟を食はざる我等の健

七 ちぢ 種々。様々。
八 寫し繪 ガラス板に描いた彩色畫を燈火によつて映寫幕にうつして見せるもの。後に幻燈と呼ぶものと同じ。
九 はかる 計る。推し量る。

かなるを見よと立上つて、牢屋の板を踏み鳴らした。役人どもは舌を捲いて驚いた。七十郎の變り者なることは藩中に隠れなきことなれども、斯くまで氣力強きは實に人間業とは覺えぬよ、彼れ如何なる法を修して食はざれども猶健かなるを得たるとて恐れを爲した。しかし當人が達者なのを強て竹輿に乗せる譯もないから、牢獄から仕置場まで歩行させた。仙城一の壯士が時運にかなはず死刑になると云ふので、知るも知らぬも見物に出掛けた。中には睫に露を置かせて、歎息の氣を洩らしたのもあつた。

七十郎はおめざ臆せず、勇士の戦場に赴くやうな活潑な様子で仕置場に坐つて四方を睨廻した。勇士の神威は自然に人の心を動かすものである。成程此人の言ふ通り、かう云ふ風では死んでも死なぬに違ひない、きつと兵部少輔殿に仇をすることであらうと、役人なども襟元から水をそゝがれる様な心地がした。つまり七十郎に自然に備はつた威光が最後の凱歌を揚げたのである。斯う云ふ時には、平生人を斬ることを瓜を斬るやうに思つて居る太刀取りでも、何となく恐ろしいやうな心地がして、やりぞこなひなどをするものである。此時も太刀取りが悸々してとう／＼首を斬りそくなつた。いつもはすつぱり斬つてしまふのを、此日に限つて半分しか斬れない。これは仕舞つたと思つて再び太刀を下さうとすると、七十郎は斬られながら後を向いて遽て、はならんと首を前の方へ延べた。太刀取りは恐れた。しかし猶豫すべき場合でないからとう／＼斬つてしまつた。此仕置の時の事であらう、萬右衛門が何か七十郎を悪口した。すると七十郎が怒つて、其方の如き卑しき分際にて我を辱しむること無禮なり、死なば報いるぞよと云つた。然るに其夜不思議なことには萬右衛門の娘が遽に狂氣して色々なことを口走り始めた。さながら七十郎の祟りのやうであつた。醫者も祈禱も效用がない。それで萬右衛門も我を折つて、盛

んな施餓鬼會じがきがいをして、七十郎の幽靈に詫びたので、やう／＼娘の病氣が直つたと云ふ話が傳はつて居る。しかし此の話は嘘かも知れない。なぜなれば萬右衛門は七十郎に同情を持つて居た男であるから、そんな七十郎の怒るやうな事を言ふ筈はないからである。

十一 施餓鬼會 餓鬼道に落ちて苦しんでゐる無縁佛を供養する法要。